

- 山口県が育成したリンドウ「西京シリーズ」は、**西南暖地向けの耐暑性が高い品種**で、本県の水田転作作物として産地化を推進。
- 全国に求められる産地育成のためには、産地規模の拡大、品質の高位平準化、安定した出荷量の確保等が課題。
- 平成30年、**生産者から実需者まで、関係機関が一体となった活動を行うため**、「やまぐちオリジナルリンドウ振興協議会」を設立し、生産技術の向上や販売対策を強化。
- 品種数が増加し、5月から9月下旬までシリーズの長期出荷が可能となり、平成30年から**首都圏への出荷**が開始された。

具体的な成果

1 オリジナルリンドウ「西京シリーズ」の産地拡大

- ①作付面積 ※(%)法人作付面積割合
H26年:1.3ha(7.7%)→R3年:3.2ha(12.9%)
- ②品種数
H26年:1品種 → R3年:4品種
- ③出荷本数
H26年:6万本 → R3年:21万本
- ④生産者数
H26年:67戸 → R3年:113戸



西京の初夏 西京の涼風 西京の夏空 西京の白露

2 出荷規格統一や県域での栽培研修会開催

- 県域で出荷規格と出荷箱を統一し、山口県のリンドウとして、関東市場へ出荷開始。
- 集落営農法人に推進し、県全域に拡大した産地において、普及が同じ栽培暦で技術指導を行うことで、課題の共有化や品質向上が図られた。

やまぐちオリジナルリンドウ栽培暦

※ 1. 栽培種別：西京シリーズ（西京の初夏、西京の涼風、西京の夏空、西京の白露）と、その他（西京の秋風、西京の冬風、西京の春風、西京の夏風、西京の秋風、西京の冬風、西京の春風、西京の夏風）

※ 2. 栽培種別：西京シリーズ（西京の初夏、西京の涼風、西京の夏空、西京の白露）と、その他（西京の秋風、西京の冬風、西京の春風、西京の夏風）

※ 3. 栽培種別：西京シリーズ（西京の初夏、西京の涼風、西京の夏空、西京の白露）と、その他（西京の秋風、西京の冬風、西京の春風、西京の夏風）

栽培種別	品種	播種期	定植期	開花期	収穫期	出荷期
西京シリーズ	西京の初夏	5月上旬	5月下旬	7月上旬	8月上旬	8月中旬
	西京の涼風	5月上旬	5月下旬	7月中旬	8月中旬	9月上旬
	西京の夏空	5月上旬	5月下旬	8月上旬	9月上旬	9月中旬
	西京の白露	5月上旬	5月下旬	8月中旬	9月中旬	10月上旬
その他	西京の秋風	5月上旬	5月下旬	9月上旬	10月上旬	10月中旬
	西京の冬風	5月上旬	5月下旬	9月中旬	10月中旬	11月上旬
	西京の春風	5月上旬	5月下旬	10月上旬	11月上旬	11月中旬
	西京の夏風	5月上旬	5月下旬	10月中旬	11月中旬	12月上旬

3 品質向上対策・開花期予測の実証ほ設置

- 高温障害、蜂の訪花による品質低下対策として、防虫ネット、寒冷紗等導入し、品質について現地実証中。
- 環境モニタリング装置の導入等、開花期予測を行うことで、市場との需給調整を図る。

普及指導員の活動

- 普及指導員の提案で、生産者、JA、行政、市場関係者が集い、「やまぐちオリジナルリンドウ研究会」を開催
- 産地化を進めるため、生産者、市場、JA、県からなる「**やまぐちオリジナルリンドウ部会**」が発足
- 普及組織が中心となり、集落営農法人へ栽培推進**
- 5月からの長期出荷を目指し「西京シリーズ」の4品種を**県奨励品種として産地化推進**
- 生産者、市場、JA、県、花商等の実需者からなる「**やまぐちオリジナルリンドウ振興協議会**」を中心に、県内外への計画出荷に取り組み、共同選花と共同販売に向けた取組を開始。出荷調製作業の効率化を図るとともに、産地の規模拡大を推進。

普及指導員だからできたこと

- ・地域の実情と人をよく知る普及指導員だから、リンドウを新規導入品目として提案し、その環境に適した栽培技術を定着させることができた。
- ・普及指導員のコーディネート力により、地域の生産者やJAと連携した活動ができ、さらに地域の活動が関係者が一体となった県域でのリンドウ振興につながっている。

山口県

やまぐちオリジナルりんどう「西京シリーズ」の生産拡大

活動期間：平成 30～継続中

1. 取組の背景

山口県で育成したりんどう「西京シリーズ」は、西南暖地向けの耐暑性が高いりんどうで、本県の水田転作作物として推進してきた。

また、国内の露地栽培では最も早く出荷できることから、県外市場からも高い評価を得ており、需要の拡大が見込まれている。しかし、一戸当たりの栽培面積が小さく、安定した出荷量を確保できないことや、品質の高位平準化が課題となっていた。



2. 活動内容（詳細）

(1) ～平成 29 年

新規作物の安定生産のため、農林水産事務所（普及）や農林総合技術センターの呼びかけで、「やまぐちオリジナルりんどう研究会」を開催し、シリーズ最初の品種「西京の初夏」の導入を県域で推進した。

農林水産事務所（普及）を中心に現地実証試験を行い、新規栽培者に推進しやすいよう、栽培マニュアルを作成してりんどう栽培を地域に定着させた。平成 28 年には、ブランド力向上を図るため、県、生産者、J A、市場からなる「やまぐちオリジナルりんどう部会」を設立し、栽培から販売に向けた協議を本格的に開始した。

(2) 平成 30 年～

- ・「西京シリーズ」での継続出荷を実現するため、県推進品種として「西京の初夏」「西京の涼風」「西京の夏空」「西京の白露」の 4 品種を推進してきた。さらに、令和 3 年から令和 4 年の 2 年間で、彼岸需要に対応する新品种「西京の瑞雲」の実証試験を行い、現地適応性を確認する。

- ・一戸当たり栽培面積を拡大するため、女性や高齢者の労力を活用できる集落営農法人にりんどうの導入を推進し、きめ細かな栽培指導を行った。

- ・県内外で、「西京シリーズ」の P R や販売促進活動を行い、認知度を高めるとともに、市場調査を実施し需要の喚起に努めた。

- ・県内市場の需要を満たし、出荷最盛期には県外市場へも安定的に出荷するため、県、生産者、J A、市場、花商組合等の実需者が連携した活動を行う組織として「やまぐちオリジナルりんどう振興協議会」の立ち上げを支援し、連携した活動を推進した。

3. 具体的な成果（詳細）

(1) やまぐちオリジナルりんどう「西京シリーズ」の産地拡大

- ・全県において新規産地が育成され、産地規模が拡大した(H28→R3)。

	H28年	H29年	H30年	R1年	R2年	R3年
作付面積	2.0ha	2.9ha	3.2ha	3.1ha	3.4ha	3.2ha
出荷本数	9万本	16万本	20万本	20万本	23万本	21万本
生産者数	82名	87名	94名	82名	108名	113名
一戸当たり面積	2.4a	3.3a	3.4a	3.8a	3.2a	2.8a

- ・品種数の増加により、シリーズの長期出荷、作期分散が図られた。
(H26年：1品種→H30年：4品種)



西京の初夏 西京の涼風 西京の夏空 西京の白露

(2) 関係者が一体となった連携活動の実現

- ・高品質・安定生産技術の普及、集出荷体制の構築、実需者と生産者の契約取引をすすめる、関係者が一体となった産地形成を目指し、「やまぐちオリジナルリンドウ振興協議会」が発足した。
- ・栽培研修会や視察研修の開催、県内外の市場や、花商等実需者のニーズの調査を行うとともに、栽培暦を作成し、出荷規格と出荷箱を統一した。H30年から、県域で目合わせ会を行い、首都圏市場へのお荷が開始された。

栽培暦

出荷規格表



目合わせ会

(3) 現地実証試験の実施

- ・首都圏へのお荷を強化することで、お荷量の増大が予想される。その対策として、選花機を導入した結果、選花作業の効率化が図られた。
- ・高温障害による花卉の着色不良、蜂の訪花による品質低下対策として、防虫ネット、寒冷紗、白色防草シートの実証ほを設置し、現在調査継続中。
- ・開花期予測の精度を高め、産地と市場・実需者との需給調整を図るため、環境モニタリング装置を設置し、現在環境データを蓄積中。



選花機研修会



防虫ネット設置区



環境モニタリング装置

4. 農家等からの評価・コメント

(美祢市秋芳町（農）ほんごうファーム植山代表)

リンドウは露地で栽培可能で、軽量であるため高齢者や女性でもできる魅力的な作目である。そのなかでも山口県産の「西京シリーズ」は株の残存率が高く、生育も旺盛で育てやすい。平成28年から法人で園芸品目の一つとして試作を始め、年々栽培面積を拡大している。令和元年からは農業大学の卒業生2名を雇用し、生産安定を目指す。県内市場に加えて首都圏の市場にも出荷し、評価を得ていきたい。

5. 普及指導員のコメント

(美祢農林水産事務所農業部 篠原裕尚)

「西京シリーズ」の生産拡大を進める中で、地域においても生産出荷組織となる花き部会が設立され、リンドウの推進体制が確立した。栽培面では、生産者・農協担当者・農林水産事務所（普及）が情報を交換し合える場を設け、研鑽に取り組んでいる。流通面では、県内市場と首都圏の市場で求められているものが異なることから、出荷規格の見直しを行うなど、関係機関で協議し改善を図っている。また市場シェアの拡大に向けて、近隣地域からも集荷し、県域全体で連携し取組を進めている。

6. 現状・今後の展開等

山口県では、オリジナルリンドウの作付面積、栽培者数は増加しており、集落営農法人の経営品目の一つとしても定着してきた。しかし、県外市場の需要に応えるには、品質向上対策に加え、継続出荷と出荷量の増加が不可欠である。今後も、農林総合技術センターで新品種育成、種苗供給体制を強化し、普及組織を中心に、新規栽培者確保や栽培技術指導を行う。

また、出荷予測情報を関係機関で共有することで計画出荷を推進している。さらにJAを主体とした共選共販出荷を進めることで、産地と市場の需給調整を行い、県内市場の需要を満たすとともに、県外市場へのお荷を拡大する。併せて、県域での集出荷体制整備を進め、安定出荷と県域出荷規格の高位平準化を目指す。